唐津・松浦郷土史誌

末盧國

令和七年十月三十日刊

輝彦

古文書史料紹介

天保九年 御三方様御駕籠副御答書写帳 戌六月　岸田八太郎

（岸田家文書166）

神田 山田 洋

『御三方様御駕籠副御答書写帳』は天保九年唐津に来た幕府巡見使を迎えた唐津藩の庄屋達の答弁記録である。これを見ると、巡見使が何を聞き、庄屋達は何をどう答えたのかがよくわかる。巡見使がやって来た全ての藩では、村々の庄屋達が巡見使に付添い、巡見使からのさまざまな質問に答えた。だから藩では何を聞かれどのように答えたのかを把握する必要がある。ここで紹介する記録は、巡見使に付添った唐津藩の庄屋が藩へ提出するために作成した報告書の控えである。これを書いたのは佐志組大庄屋の岸田八太郎（安蔵）、彼は巡見使対応の「惣掛」に任じられていた。

江戸からやって来た巡見使は、将軍の代替わりの時に旗本三人一組で全国を八ブロックに分けて派遣された。最後の派遣となった天保九（一八三八）年は、十一代将軍の徳川家斉から十二代家重への交代の時である。将軍の使者として九州へ派遣された巡見使の名前と所属・石高は次の如くである。

◇正使　曽我又左衛門
　使番二〇〇〇石
◇副使　大久保勘三郎
　小姓組一二〇〇石
◇目付　近藤勘七郎
　書院番一四〇〇石

天保九年唐津へ来た巡見使の曽我又左衛門の御駕籠添として付添ったのは、相知村大庄屋猪八郎と畑河内村大庄屋庄左衛門である。以下、二人の報告記録写しを紹介する。

戌四月六日暁七ツ時水嶋御分石江罷出候處六ツ半時頃御出ニ被成候ニ付御駕籠脇衆江唐津領大庄屋御付添ニ罷出候旨申立両人共ニ手札差上候處何之御沙汰茂無御座候得共直ニ御駕籠御左右ニ付添居候處松原内御立場之御駕籠立申候故暫扣居候内池田乙右衛門様御出ニ相成御駕籠之口より暫御咄御座候、其内ニ関真平様茂御出ニ被成御同人者直ニ駕籠へ御召案内ハ無之哉と御尋ニ付、御先者御案内養母田村名頭庄右衛門遣申候、乙右衛門様御立掛我々両人江御沙汰御座候は追々御尋有之候ハ、御答申上候様御沙汰御座候

無間茂御□□上り申候ニ付御左右ニ付添罷越候へ共何之御尋茂無御座水嶋入口ニ而御駕籠脇へ申上候ハ此人家内御通筋へ御立場設御座候船ニ被召御渡場御座候旨申上候へ共御駕籠立不申直ニ御番所下御船場へ御出ニ被成新堀へ御上り御立場へ暫御休御座候、其節御駕籠脇へ申上候ハ当所無間茂市中ニ相成候ニ付御役之者罷出御駕籠添相勤候ニ付私共儀ハ端桜之馬場と申所ゟ又々御駕籠添相勤候旨申上、無間茂御駕籠上り候ニ付大石町口迄御付添申上是より市中ニ付先刻申上候通御先江駆抜可申申上候処、御太儀と申御挨拶御座候、左候而直ニ桜馬場へ罷越候処無間茂御出ニ相成御付添之旨申上御駕籠御左右ニ付添申候、夫ゟ佐志村御入込ニ而濱田近く相成候ニ付、此松原之へ御立場御座候と申上候へ共此先江立場可有之御跡ゟ追々御出有之候ニ付先之立場迄ハ何丁有之哉と御駕籠脇ゟ御尋ニ付拾丁程御座候八丁之坂御座候而難所之旨申上候処何分其所迄参候と御申被

【題簽】志佐　惲彦
（一九三二―二〇二五）

昭和四八年に佐賀県立博物館に奉職後一七年間、佐賀県の文化財の保護に尽力され、その後、旧厳木町教育長、唐津市・多久市の文化財保護審議会委員、平成一七年の合併後、唐津市文化財保護審議会会長を歴任された。長年、松浦史談会会長、顧問として史談会の維持運営の重責を果たされた。専門は仏教美術。令和七年三月ご逝去。

◎特別展案内

【佐賀県立博物館・美術館】

◆『売茶翁と若冲』売茶翁生誕三五〇年記念特別展

会期：一〇月七日(火)～一一月二四日(月・祝)

江戸中期肥前の禅僧、売茶翁と京都画苑の伊藤若冲等との交流から売茶翁を改めて検証する企画展

観覧料：無料

問い合わせ先・佐賀県立博物館・美術館　〇九五二－二四－三九四七

【九州陶磁文化館】

◆開館四五周年記念特別展『初期伊万里ビックバン』展

―日本磁器始まりの全貌―

会期：一〇月四日(土)～一二月七日(日)

約四〇〇年前、肥前地方で突如として白くて硬質の磁器が開発され、産業として発展した。その初期伊万里の優品と草創期の資料を通じて、これまでの研究をもとにその起源と発展の真相に迫る企画展。

問い合わせ先　九州陶磁文化館　〇九五五－四三－三六八一

末盧國　第二四二号
発　行　松浦史談会
事務局　唐津市旭が丘六－五
電　話
郵便振替口座
〇一七二〇－七－三〇八〇四